

学生記者が

「新入生ワークショップ」体験取材

情報交換、役割分担、相互扶助：など学ぶ
問題解決能力を高め、今後に生かす自信掴む

『よりよい学生生活を送るきっかけを探ってみませんか』。こう呼びかけるチラシに誘われるように学生記者の上田雄太（以下、記者）は、5月25、26日の1泊2日で、高尾の森わくわくビレッジで行われた「新入生ワークショップ」（学生部企画）に参加、体験取材した。

1泊2日のプログラムに18人参加

25日は朝からあいにくの雨。参加した学生は18人（男性12人、女性6人）。「新入生」と銘打っているように新生活に不安のある新入生の参加を歓迎する企画だったが、残念ながら参加者の中に新生は1人もいなかった。

グループでの参加が2組ほどいたが、1人での参加者も数人。記者はその1人で、みんなが初対面だ。山田万里江さん、岩崎直快さん、神沙織さんの3人は、いずれも総合政策学部2年の小林勉先生のゼミ生で「先生のアピールに洗脳されて参加した」という。

一方、目的があって参加を決めたのは、山岸怜奈さん（総合政策学部2年）。「PAについて知り

たかった。以前ボランティアで参加してからPAに興味を持ち、恩師にやってみるよう勧められた」というのが参加理由だ。

PA（プロジェクト・アドベンチャー）とは、ファシリテーターと呼ばれるインストラクターの指導の下、専用の野外コースを利用して、他人への理解、チームワーク、チャレンジ精神、問題解決能力、そして自己理解を高めるためのプログラムで、企業研修やアテネ五輪柔道日本代表のトレーニングの一貫としても取り入れられたこともある。今回の企画の最大イベントだ。

「あだ名」呼び合い、打ち解ける

雨模様のため、体育館でアクティビティ（活動）

開始。最初は、アイスブレイキングと呼ばれる簡単なゲームで、まずは初対面のメンバーの顔と名前を覚え、緊張した気持ちをほぐすためのちよつと変わったじゃんけんや鬼ごっこを行った。

この時、一人一人があだ名を簡単に披露したが、人前で話すことが苦手な記者は、自らのあだ名を「ウエ」と紹介したものの緊張の連続であった。少しずつ打ち解けてきたところで、次に行ったのはチームワークを必要とするゲーム。全員で円になって、フラフープをどれだけ早くくぐり抜けることができるか、等のゲームをいくつか行っていく。このとき全員で話し合い、目標を設定しチャレンジする。これが午後のアクティビティに生かされていく。

午前のプログラムはこれで終了。まだプログラムの半分も終わっていないのに記者はもう疲労困憊だ。

相互の信頼高め、課題にチャレンジ

昼食休憩を経て、午後からは雨も止み、外で活動。午後は、まず2チームに分かれた。その中で2人1組のペアになり、1人が手を胸の前に組み目を閉じて、直立姿勢のまま後方に倒れる。それをもう1人が受け止めて支える。これはトラストフォールと呼ばれ、後ろ向きに倒れる人は、支える人を信頼しなければ倒れることはできない。ここで信頼関係をさらに深める。

そこで、いよいよローエレメントと呼ばれる低



ワイヤー渡り。全員の協力が必要だ

返りを行う。なぜ達成できたのか？何がよかったのか？では次に何が生かせるのか？を考えさせられ、チーム全員に発表する。

90cm四方の板状に18人が立つ

次に行ったのは、長い丸太の上に全員が一列になって立ち、丸太から落ちることなく、誕生日順に先頭から並び替えていくテレホンポールシャッフルという課題だ。一見、モホーク・ウォークより簡単そうに感じるが、これが意外と難しい。落ちてしまうとまた元の位置に戻り、最初から始めなければならぬ。ここでも話し合いが重要で、提案された意見を何度もトライしていき、これも何とかクリアした。

これまでの振り返りを行う。自分はこれまでどうだったか？最後の課題に向けて自分はどうするかを全員に伝える。

そしてチャレンジ開始。とにかく難しい。90cm四方のスノコ板に18人、36足をのせて、1人も落ちず固まって乗るなんて、どうみても厳しい。

ロープで別の板状に飛び移る

ここでもみんなで話し合い、知恵を出し合う。何度も方法を変更してチャレンジする。だが、何度やってもクリアにはいたらぬ。うまくいきそうになっても、崩れる。普段ならここで諦めてし

い位置に設置された野外コースに挑戦だ。

最初の課題は、モホーク・ウォーク。丸太と丸太の間は4、5mあるだろうか、そこに低く張られたワイヤーの上を協力して、全員が渡り切る。

ワイヤーが揺れるから1人では絶対にムリ。チーム全員の協力が必要である。「男女の順番を変えよう」、「腕の組み方を変えよう」。手をつないでいたのを、2人、3人と腕を組むようにすると安定感が増す。「こっちの方が良いと思う」と意見を出し合うが、簡単にはクリアできない。失敗するたびに何度も話し合う。

クリアすると今度は、ファシリテーターが振り

最後は、18人全員で行う二トロックロッキングである。これが超難関。90cm四方のスノコ板の上に18人全員がぎゅう詰になった立ち、数m離れたところに置かれた同じ大きさのスノコ板の上に、上から垂れ下がったロープを使って、ターザンよろしく18人全員が乗り移るというものだ。これもまた1人が落ちたら、最初からやり直し。

チャレンジする前に、全員で



なかなか飛び移れない。トライは何回も続いた



落ちたら全員が最初からやり直したから、責任は重い

まうところだが、ここまで来ると、仲間への信頼、チームワーク、チャレンジ精神は最高潮に達している。誰一人として弱音を吐くものや諦めるものはいない。

板に乗る順番は、女性が先で、男性が周囲を固めて支えた方がいい。もう一方の板に渡る最初の人は、身軽な男性がいい。トライを重ね、徐々に方法が固まってくる。

疲労で体力が落ちてきているにも関わらず、全員の結束は揺らがない。

2時間以上かけて超難関クリア

そして、その硬い結束によってついにクリア。はじめてから2時間以上が経っていた。ファシリテーターからは「すばらしい」の言葉をもらった。最後は、年齢、学年、性別すべて関係なく、本当の一つの仲間になっていた。

風呂に入り、夕食後は、商学部の森谷暢先生によるエニアグラムと呼ばれる性格診断を使用した自己分析をもとにグループミーティング。自分の



難関をクリア。その瞬間、みんなひとつの仲間になった

強み、長所、問題解決に役立つ考え方を話し合い、各自が発表。自分のことを知り、自己を見つめ直すことができ、これから就活を控えている記者にとっては、大変参考になった。

これで朝から休みなく続いたプログラムはすべて終了。とても濃い1日であった。

「体験をこれからに生かしたい」

ワークショップを振り返って山岸さんは、「PAでは、ハイエレメント（6〜10mの高さに仕組まれた丸太などの上で、安全ベルトとロープでグループのメンバーに安全を確保してもらいながら行うプログラム）を期待していたが、出来なかったのが残念。でも今までは中大以外の活動が多かったので、今回、中大の学生と一緒にやる事が出来て良かった」と話す。

岩崎さんは、「楽しかった。自己紹介や役割分担などを意識してやったことで、これからイベントなどで生かされていくと思う」。山田さんも「今日得たものをこれからの生活に生かせるようにしたい」と語り、神さんは「初めて会った人と色々な話が出来たし、色々な体験が出来て良かった」と話してくれた。

記者にとっても今回の体験は貴重なものであった。自分を再発見してみたい方、日々の生活に嫌気をさしている方、ぜひ来年参加してみたいかがだろうか。

（学生記者 上田雄太Ⅱ文学部3年）